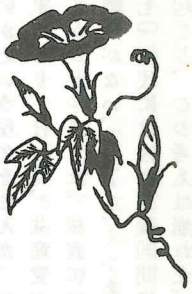
仙台司教区 教区事務所だより



（第　58　号）
昭和57年8月1日

教区司祭大会で平和問題を学習▽：

「キリストの平和と現代社会」司牧目標の推進に期待！

さる6月21日午後から23日の午前中、仙台市錦町の仙台共済会館で行われた仙台教区司祭大会は、「キリストの平和」をさまざまな面から考える司祭たちの勉強会だった。すでに年頭の司教書簡で、仙台教区むこう三年間の司牧目標、「家庭から社会にキリストの平和を」が示された。一年目の今年は、キリストの平和とはなにかを考えるようすすめられている。信徒司牧に責任を持つ司祭には、とくに平和の勉強は大切で、今回の大会テーマ「キリストの平和と現代社会」は、当然この司牧目標との関連でえらばれた。その意味で今回の司祭大会は、司牧目標推進の大きな力となることが期待される。

一年おきに開かれる大会には、佐藤千敬司教をはじめ、青森、岩手、宮城、福島の教区四県から五十一人の司祭が参加した。各地区からの司祭が一堂に会する機会はめったにないので、夜おそくまで司教を囲んで話し込んだり、常には会えない司祭同士がにぎやかに交歓したり、仙台教区で働く司祭共同体の一致、連帯感が大いに盛り上がった。これも司祭大会の大事なねらいであった。

◉平和問題の理解のための講演

大会の最初に、日本被団協顧問、カトリック正義と平和協委員行宗一（ゆきむね・はじめ）氏＝大宮教会所属＝が、「現時点の平和」と題して、いま世界の流れとなっている平和の動きを、反核、反戦の立場から話し、キリストの福音による私たちの信仰生活に結びつける道を示唆した。

行宗氏自身の被爆体験を交えて原爆被害を語ったが、被爆者－原爆をさらに人類－原子力開発と発展させた発想は、現在の反核、軍縮の平和活動を理解するための大きなポイントになろう。

また、現在の国際的不安のもとを、原子力開発等に見られる科学の極限的進歩と、人間的えい智の格差からと見、人間の心が原爆をなくし世界を平和にする基礎にならなければならないとした。それは心の問題をどう扱うかが平和問題の課題であることを示し、人間の心にかかわる宗教者、教会、つまり私たちの責任であることをも示している。

平和のもつ意味の多様さ。ふだん祈っている心の平和とか家族の平和。それは反核、反戦の平和と全く同じではない。そして平和を戦争との対概念として考えることは誤りだとした。むしろ平和の状態とは、構造的暴力の大きいか、小さいかによって示されるという。実態の見えにくい構造的暴力の例として次のことをかかげた。たとえば私たちが物質的に豊かな生活をのぞむと、その結果、低開発国の資源を奪い、公害工場を押しつけたりして貧しい人々を圧迫する。深く考えさせられる私たちにかかわる大きな問題である。

（2面へ）

司教日程（7月2日現在）

8月2日　教区司祭団役員会（仙台）
4日～6日　カリタス・ジャパン保育部会全国大会（仙台）
15日　聖母被昇天会誓願式（青森）
17日　コングレガシオン・ド・ノートルダム会来日50周年記念（東京）
29日　カトリック医師会総会（仙台）
9月5日　二本松教会・飯野教会訪問
6日　教区司祭団役員会
9日　宮城宗法連研修会（仙台）
19日　福島県信徒大会
23日　司牧評議会（仙台）

司教、教区記念日にカテドラルでミサ（6月27日）

青少年に、ペトロ、パウロに倣う使徒的精神を説く

教区長・佐藤千敬司教は6月27日午前9時半から、カテドラルで聖ペトロ聖パウロ使徒のミサをささげた。カテドラル元寺小路教会は両使徒にささげられ、同祝日（6月29日）が献堂記念日。同時に初代教区長レミュー司教の叙階記念日にもあたり、仙台教区の創立記念日でもある。佐藤司教はミサ中の説教で、両使徒のもつそれぞれ異なった性格、才能について話し、聖ペトロの素朴な人間性、聖パウロの熱心な行動力にならい、とくに若い人々に使徒的活動を訴えた。司教は年間、元旦、霊名祝日、復活祭、聖霊降臨祭、教区記念日、降誕祭にはカテドラルで正式にミサをささげる。同日の聖ペトロ聖座への献金は、全世界の信者が教皇のためにささげるもので、教皇大使館を通じ直接教皇庁に送られる。これは全世界の必要とする教会に使われるが、日本の教会にも配分されている。

福音と平和は一体

（一ページより）

また行宗氏は、反核平和の市民運動が盛んになっているアメリカで、とくにカトリック教会が活発に活動していることを紹介された。各地の司教、大司教が公然と声を大にして、核兵器が絶対悪であること、これに対する非暴力的抵抗運動がキリスト教徒の義務であることをいい始めているという。そこでは福音そのものと平和と一体であることが主張されている。

どうしたら平和がつくれるか。平和学者は次の三つのことが平行して成長してゆかなければならない、といっている。平和がどういうものかという平和研究、平和の教育をどういう風にするかという平和教育、そして実際の平和活動の三つである。

行宗氏は最後に、日本における平和活動の流れについて述べた。平和を中心にした日本国民の思潮の流れというべきものでもある。戦後の十年は誰もが厭戦の気分で、戦争などはあり得ぬと思った。一九六〇年代、ベトナム戦争で、市民運動が起こり、日本人がこれまでもっていた戦争被害者という意識が、加害者ではないかという反省を生んだ。政府やアメリカ追求により、社会党、共産党が政治として平和にかかわってきた。根底には社会主義国には戦争がない、という考えがあった。しかし一九七〇年代には社会主義国間にも対立や戦争が起こり、この考えは崩れた。そのあと混迷の平和運動の中で、一九七七年ごろよりひとつの流れとなったのは、被爆問題から発した反核運動。反軍備、平和運動へと進んで今日に至っているという。

日本の教会は、教皇の訪日、広島での説教によって反核、平和の草の根運動をはじめつつある。被爆国の責任として、また世界に大きな影響を与えるカトリックだから、大きな勇気をもって平和運動を推進してほしいと願い、基調講演は終了した。

司祭大会はこのあと、宣教会などの各地区が担当した発表を行ったが、その内容は次号で紹介することとする。

平和旬間に共に祈りを！

―8月6日～15日―

日本カトリック司教団は、今年から毎年、8月6日から15日までの10日間を、「日本カトリック平和旬間」とすることを決定した。この期間が選ばれたのは人類最初の原爆投下を受けた6日（広島）、そして長崎が被爆した8月9日を含め、第二次世界大戦の終結日であり聖母被昇天の大祝日である15日までとしたもの。

'82年間目標

家庭から社会に
キリストの平和を
（仙台教区）

聖書を生かす生活を考える

―第11回宮城県信徒大会　白百合学園で―

昭和五十七年度宮城県信徒大会はさる7月4日、仙台白百合学園で開かれ、県下十七教会から約五百人の信徒が参加した。大会テーマは「聖書とわたしたちの生活」、日常の生活をいかに福音的に行ってゆくかという問題提起である。パネルディスカッションを中心にし、パネラー(発言者)には父親、母親、教師、司祭の各代表と、仙塩地区中学生会、元寺小路高校生会から四人の中・高生をえらんだ。よく準備された進行で、聴衆にまわった信徒たちは、各パネラーの活発な質問や発言の中から、信徒としての具体的な生き方、考えなどを学んだようだ。幼児・小学生を対象にした子供部会も並行してひらかれ、映画やスライド鑑賞などもあって楽しい一日を過ごした。大会は佐藤千敬司教と参加司祭全員の共同ミサで終了したが、佐藤司教はミサの説教で隣人に福音をつたえる信徒の使命が、具体的に洗礼のお恵みにまでみちびくよう、福音宣教のいっそうの努力を望んだ。宮城県の教会は、さる5月30日「宮城県信徒協議会」を発足させ、発展が期待されている。

『藤ホーム』落成

＜青森＞

養護老人ホーム藤ホーム(園長・斎藤ウメノ修道女)の新築建物の祝別・落成式が、6月8日(火)午後2時から、青森市大字駒込字蛍沢三八七の同ホーム聖堂ホールで行われた。祝別式は佐藤千敬司教の司式のみことばの祭儀の中で行われ、気遣われていた天候も晴天に恵まれ、平日にもかかわらず百三十人以上の方々が出席、落成の喜びを共にした。

藤ホームは昭和34年に生活保護法による養護老人ホームとしてゲオルギオのフランシスコ修道女会のもとに開園、時代の変遷に伴い個室化が叫ばれるようになり、今回、移転、新築に踏み切ったもの。

新ホームは居室28(二人部屋)の他聖堂、集会室、食堂、ホール等で総面積二六四一㎡、ホームのお年より達は、今までの6人部屋にくらべ「ホテルのようだ」「もったいない」などと喜びを率直にあらわしていた。これからは建物と共に内容もさらに充実させていきたいと、関係者一同希望にあふれている。

仙台教区修道女連盟研修会

＜仙台＞

去る6月27日(日)午前9時30分から仙台教区修道女連盟の研修会が仙台白百合学園で開かれた。講師は毎日新聞論説委員でカトリック信者の徳岡孝夫氏。「現代社会と修道者」というテーマで二回にわたって講演した。氏はベトナム戦争の際、8年間現地で取材活動に従事、その豊富な体験から戦争がいかなるものかを語り、世界のどこかで常に戦争が行われているという事実の裏に、戦争がかりたてる人間のいやしがたい心情、まさに「原罪」ともいうべき根源的なものを提示した。そしてすべての人間の心にひそむエゴイズムを互いに恥じらいをもって認めながら、謙虚に、〝主と共に歩む旅人〟でありたいと結んだ。

同修道女連盟は、仙台教区の四県で活動する修道女(現在三百四十二人)で組織され、毎年一回研修会を行っているが、今年は約百人が参加した。

司祭銀祝おめでとう

マルク・ラフォルト神父様
ジル・ランドルヴィル神父様

ケベック外国宣教会のマルク・ラフォルト神父と、ジル・ランドルヴィル神父は今年司祭叙階二十五周年を迎えた。ラフォルト神父は7月1日、ランドルヴィル神父は6月29日が叙階記念日。二人共カナダ人で共に一九五三年ケベック外国宣教会に入会。一九五七年叙階、その翌年の一九五八年(昭和33年)に来日した。

ラフォルト神父は現在八戸市の白菊学園高等学校の宗教科教師として学校教育を通し、また、ジル・ランドルヴィル神父は五所川原教会の主任司祭として地域社会との交わりを大切にしながら、福音宣教につとめている。

ケベック外国宣教会では5月に行われた黙想会の折り、両神父の銀祝を兄弟的交わりのうちに祝い、喜びを共にした。

※　※　※

各地区で幼稚園教職員研修会ひらく

〈青森〉　去る6月11、12の両日、第18回青森県カトリック幼稚園連盟教職員研修大会（委員長・高瀬和夫神父）が青森市のホテル・青森で行われた。参加者は県下の教会、修道会付属および、信徒が経営する十八幼稚園の教職員百四十四人。大会のメインテーマは、「よい隣人となるために」であった。桜の聖母短期大学学長今泉ヒナ子修道女が、テーマにそって三回の講演を行い、深い信仰体験と教育者の立場からの発言は、若い女子教職員に深い感銘を与えた。

〈岩手〉　岩手県のカトリック幼稚園の第十八回研修会は6月9、10の二日間にわたり盛岡市繋温泉、ホテル大観を会場に行われた。講師は札幌藤学園大学教授後藤平吉氏。「教師の理想像について」というテーマで現代の家庭の諸問題をあげながら、子どもの側に立った保育が大切である事を強調した。

この研修会には、佐藤千敬司教も出席した。

〈宮城〉　宮城県カトリック幼稚園連盟（委員長・土井勝吾神父）は、昭和57年度の教職員研修会を6月17日(木)に東仙台ナザレト幼稚園で開催。講師はベトレヘム外国宣教会管区長・ツーゲル神父。「人間関係について」（副題＝キリストの示す理想）というテーマで講演した。また幼児の祈りの導入としての音楽について、ドミニコ学園幼稚園園長佐々木正子修道女が実技指導を行い、それぞれ違った立場から保育について見なおす機会となった。

YBU心のともしび運動三十周年記念

文化祭と講演会　九月に開催

YBU運動が京都でハヤット神父によって始められてから今年で三十年になる。東京では30周年を記念して6月に盛大な記念式典が行われた。仙台YBUはケベック会のジョリコール神父がこの運動に協力、ラジオ・テレビ放送の番組の東北、北海道担当、心のともしび東北版の発行、語学教室、書道、華道、茶道の文化教室、子ども教室などを開き、今日に至っている。マスメディアを通じて広く福音を伝えるこの運動が、更に発展していくよう願いながら、YBU仙台支部では9月25、26の両日、次のような記念行事を計画している。26日には午前9時半から同所で、佐藤司教による感謝のミサが捧げられる予定。

記

場所　仙台市民会館展示室（入場無料）

内容　◉作品展示（茶道、華道、書道）

9月25日(土)午後1時から5時

26日(日)午前10時から5時

◉講演会

・曾野綾子氏「現代に生きる聖書」

25日(土)　午後3時から

・佐藤直助氏「茶、花、書のこころ」

26日(日)　午後2時から

主よ！あなたの呼ぶ声が……

東北・北海道地区修道会修練者合同研修会

東北・北海道の四つの女子修道会の修練院が共同で年に一度の合同研修会を行っているが今年は6月30日から7月4日まで函館近郊当別のトラピスト修道院を会場に行われた。参加したのは札幌の殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道女会、弘前の聖母被昇天修道女会、仙台のオタワ愛徳修道女会と聖ウルスラ修道会の4修練院から15人。「神の愛を生きる」をテーマにオタワ愛徳修道女会のシスターモニック・ブッシェがセッション・ロッシェの方法で指導、この研修会は修道生活の道を歩み始めた者同士が、共に祈り共に語り、そしてそれぞれの具体的生活の場での体験を分かち合う年に一度の機会であり、また仲間の少ない修練者同士が志を新たにする時ともなり、修練期における大きな恵みの時として味わっている。

なお、仙台にある二つの修道会の修練院では毎週合同研修会を持っているが、今年度の集中研修会は次のようである。

9月「主の祈りについて」　リベラ神父（イエズス会）

10月「マリア論」　津田神父（マリア会）

11月「内的生活」長岡神父（カルメル会）

12月「祈りについて」　イバニエス神父（イエズス会）

1月「マテオ福音書」　ベロー神父（ドミニコ会）

2月「福音宣教」佐々木博神父（教区）

読者のページ

〝わが家の祈り〟

花巻教会　福山　芳弘

「天にましますわれらの父よ：」芳生は御飯を盛りながら、芳三はテーブルの下の朝刊のチラシを片づけながら、芳太郎は、きっと目を閉じ、母さんは出勤間際の8時に間に合うように私と芳生の弁当を作りながら：。

「願わくはみ名の尊とまれんことを：」。

忙しいわが家の朝の祈りと食前の祈りの風景である。祈らなければ御飯は食べられないということが頭に入っているから自然にこういうことになってしまう。

また一週間に一度位、私も夜の祈りの時間に間にあって一緒にする事があります。祈りが終わって一人一人が反省のようなことを言うわけだが、まず芳生から始まって、「無事に学校に行けたことを感謝します」。芳三は、「無事幼稚園に行けたことを：」。小さい芳太郎はないと思って、「次、母さん！」と言うと異議ありで、「ボクも！」何でも兄貴と同じでなければ満足しない。「よし、では芳太郎！」と言うと、「願わくは：。ウンチ：」

私は毎日、うそのない純粋な祈りというものを自分の子どもを通して感じている。子ども達の祈りの相手は確かに私でも妻でもなく目に見えない神と呼ばれる相手なのである。何の疑問も持たずあたり前といった感じで祈る。これは私にとって素晴らしい世界である。

私の子どもの頃、そして妻の幼少の頃、恐らくこの様な経験はないはずである。もしこの子ども達が一人前に成長した時、どのような人間になるか。成長の過程で大きな疑問と壁にぶつかる時があるに違いない。その時判断の材料となるものは過ぎ去った生活の日々であり、その経験が子ども達の知識となって、意志決定の基礎となるのではないか。

「願わくは、わが家族を守りたまえ」とは、今の私の切実な祈りである。

短歌

四ツ家教会　鷹觜　クニ

◇終戦の前防空ごうにて神父の言う
　完全なる痛悔せよと合掌す

◇敗戦にゆくりなくも生きしこの
　倖は、慈母マリア守護の賜物

◇戦争は終えたりと息づきし四ツ家
　教会にベトレヘム宣教師来住す

鮫教会の有志　教会交流の旅へ

八戸・鮫教会（渡辺昭一主任司祭）では、ちょうど仙台七夕の8月7日、8日に、仙台の教会を訪問する。今回の旅行には、広瀬川殉教地への巡礼をはじめ、すでに交流をもっている塩釜教会、一関教会との交歓会が計画されているが、仙台の宿舎となる東仙台の旧司祭会館の庭の、草取りも入っている。教会交流の新しい試みで報告記が待たれる。

春秋

公会議ということばが聞かれなくなって久しい。ラテン語典礼によるミサが遠い昔のことだったような気がする。公会議に対する思いも、同じように遠い昔のことであるとしたなら：：。

最近、ヨハネ二十三世教皇の「地上に平和を」を読んだ。改めて教皇の慈父としての温かさに触れ、そして公会議の目指したことを生きるようにと励まされた思いがする。

ヨハネ二十三世教皇は、「和解と理解の人であり、つねに人びとを結びつけるものを、隔てるものよりも重んじた。」「全ての善意を信じ、この信頼によって人びとを善なるものに変えたのである。」

彼は公会議によって「キリスト教の現代化」を図り、「人びとの心から、キリストが放つ光をおおっているすべてを取り除こうとした。」「彼が教皇としてキリスト教の中に求めたものは教勢の拡張などということではなかった。むしろ、人間らしい生活の原動力となる要素をキリスト教の中によみがえらせ、訴えかけるということであった。」

もしも今、教皇のこの思いを無にしようものなら、「公会議以前」の誹（そし）りをまぬがれ得ないであろう。（狼河原）

おらが教会 (22)

岩手 水沢教会

水沢カトリック教会は、水沢市のほぼ中心地にあって、古い歴史とその伝統を、現在、そして未来へ継承しようとしている古くて？新しい教会です。

教会の正面に立つと、腰に刀をひっさげ、屋根のところで天空のかなたをみつめる大きな武士像が目に入ります。教会の門に立った人はこの武士像を見て、「どんな事をなさった人だろう」と興味をそそられる事でしょう。

この武士の名前は「後藤寿庵」。歴史をひもとくと、元和の昔、伊達政宗の家臣であった寿庵は、全くの不毛の地、胆沢の原野に遠く流れる胆沢川の水をひき、堰を造り、岩手県一の米倉と呼ばれる豊かな土地にする基礎を造ったのでした。寿庵はまた、熱心なキリスト信者でしたが、この堰の大工事が三分の一ほど進んだ時、キリシタン迫害が勃発。着工された仕事は中断、寿庵は棄教をせまられても屈せず南部へ追放という憂き目に会い、その後全く消息がわからず、〝幻の人〟と呼ばれるようになったのです。しかし寿庵の残した遺徳は代々語り継がれ、水沢地方の人々の心の中に今も生き続けています。大正13年、当時の皇太子（現天皇）の御成婚の式典に後藤寿庵は死後三百年を経て従五位の贈位を送られました。いつの頃からか寿庵の遺徳をしのび寿庵祭が行われるようになり、最初は神武の祭典として祝われていました。昭和25年ベトレヘム宣教会が岩手県内の布教を担当することになり、水沢にもカトリック教会が当時の初代主任司祭のヨゼフ神父の手で建築されました。

カトリック教会が町になじみ深くなった結果、春にはカトリック教会の寿庵祭の式典、秋には神武の祭典が行われるようになったのです。特記すべきことは、水沢名物の三傑ともいわれる高野長英、後藤新平、斎藤実らもこの寿庵の高潔な精神を学び、何らかの使命に目覚め、それぞれ自らの道に精進したといわれています。

現主任司祭はヨハネ・ローネル神父。大きな身体と大きな声が特徴で、いつもニコニコと接し、誰とでもすぐ友だちになって下さいます。いたる所から講演の依頼があり、話のうまさと面白さは、水沢市民の誰もが知っているところです。教会内ではアルクラ・コーラスを組織し教会行事への参加、演奏活動、またボーイ・スカウトの青少年の育成など、多彩に活動しています。教会の信徒数は百三十九人、信徒会を中心に厚生福祉部、典礼部、ヨゼフ会、愛の実行運動とに分かれて、それぞれのタレントに応じて活動しています。子ども達の信仰教育は日曜日の御ミサの後に日曜学校を開き、春には修養会、夏は夏期学校などがあります。長年教会付属幼稚園として経営されていた金ケ崎幼稚園は56年度をもって、金ケ崎町に移管されました。すべて神の御計画と受けとめております。

大人の聖書の勉強会は、第一、第三の金曜日に聖書のつどいとして開かれ、聖書に親しみ、みことばの理解に努めています。

現在、「愛の輪を広げましょう」のスローガンのもとに信徒同士がお互いに認識しあい、共同体として家庭的なつながりを大切にしようと模索中です。ともすれば社会の流れに逆らえない事が多い現在、今こそ教会の活動を活発にし教会の愛の泉を社会へ、キリストの肢体として使徒職に目覚めて働けるようにしていきたいと願っています。（佐藤　元子記）

【おしらせ】

◉第19回カトリック社研セミナー

・テーマ「ロボット化社会と人間」
・時　8月20日(金)～22日(日)
・所　横浜雙葉学園（横浜市中区山手町88）
・主な講演
「ロボット化は人間に幸福をもたらすか」（横浜商科大学教授・前川良博氏）
「生産現場からの証言」（川崎重工労組相談役・森則雄）
「ロボットと神」（J・ムルグ神父）

仙台司教区事務所だより第58号
昭和57年8月1日発行
発行所　仙台司教区事務所
〒980 仙台市本町一丁目2番12号
TEL 0222 22 7371